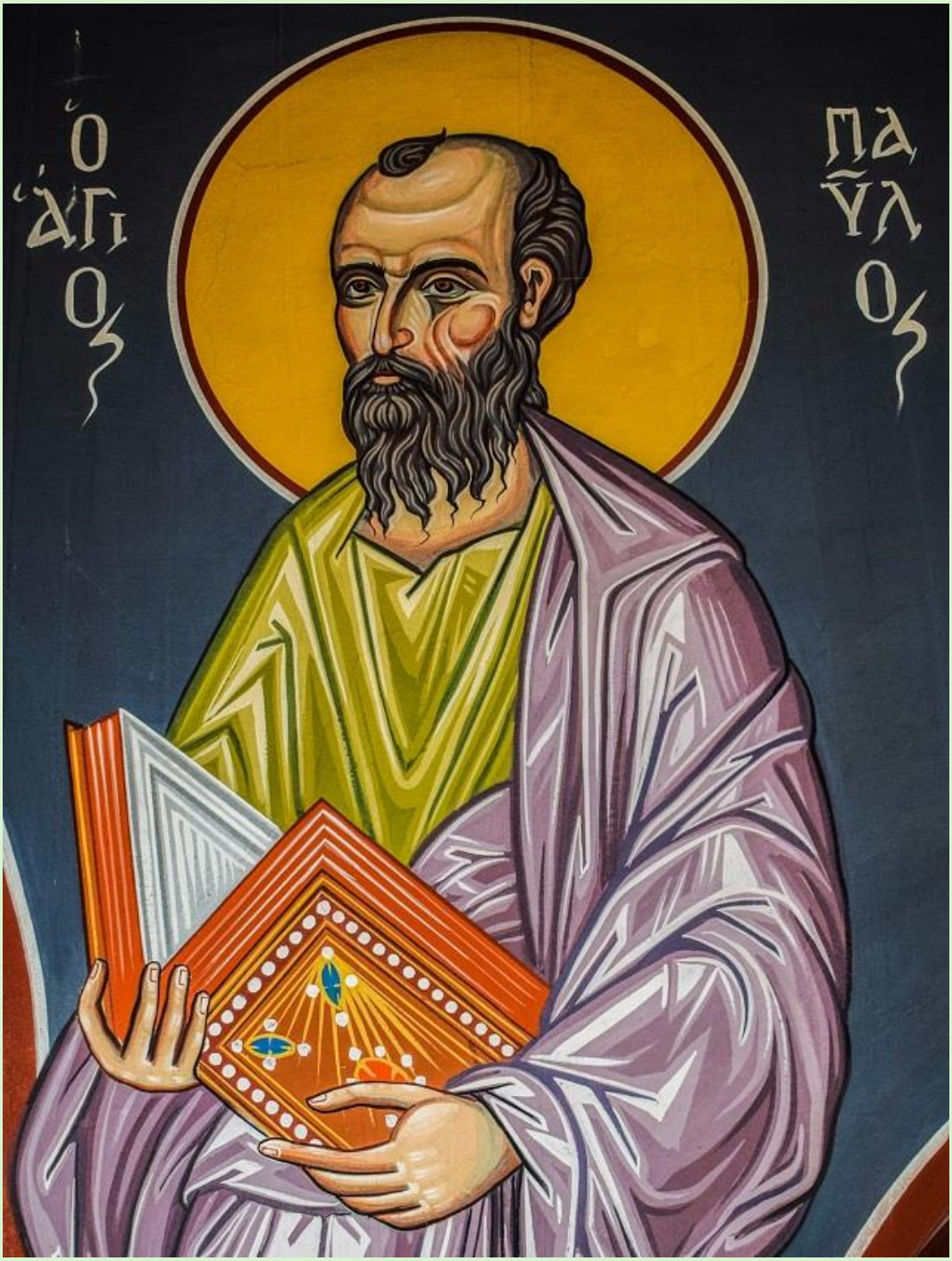
豊明希望チャペル礼拝

2024／10／27

「キリストは万物の上にあり」

ローマ人への手紙 9：1～5



ローマ人への手紙から教えられています。この書を書いたのは、パウロという人物です。本日の箇所は、このパウロの、特に人間パウロとしての思いが色濃く出た部分であります。そして、その内容は、クリスチャンにとっては、少し、違和感を覚え、あるいは、つまずきさえも覚える人もあるのではないかと言う内容です。

今日の、3 節にはこのようにあります。

「9:3 私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」

「肉による自分の同胞」とは、イスラエル人のことです。パウロは、このイスラエル人を、ユダヤ人とも呼びますし、ヘブライ人とも呼ぶことがあって、微妙に使い分けているようですが、ユダヤ人は、ユダヤ人は民族名なので世界中どこに住んでいてもユダヤ人ですが、イスラエルとくのは、古代イスラエル王国にしても現代のイスラエルにしても通常は国の名前なのでイスラエル国の国民を指していると考えられます。

彼が言っているとおり、「肉による自分の同胞」であり、「ウサギ追いしかの山」一緒にウサギを追って遊んだね・・・というような、故郷の人たちということを特に強くイメージする意味で使っているのかもしれません。

家族や親しい人たちを守りたいというのは、人としても、クリスチャンとしても、むしろ、大切なことだと思います。ただし、「違和感、つまずき」と最初に言いましたのは、家族や、親しい故郷の人たち、国の同胞を守るためなら、「私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」という彼の言い方です。

そももそ、パウロは、この 9 章の直前に、こう言いました。

「8:35 **だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。**苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。・・8:39 高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、**私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たち(パウロも・・)を引き離すことはできません。**」と言いまして、この文脈で読むと、「何も、私をキリストの愛から引き離すことは出来ない。・・・ただし、肉の同胞、イスラエルの、うさぎ追いし仲間と家族のためなら、キリストから引き離されてもいいし、何なら、呪われてもいい。」と言っているのです。

若いときに、この聖句に触れ、しばらく、考え込み、聖書を開けなくなるほどに、いわば「つまずいた」ことを覚えています。

その答えは、今日は 5 節までしか読みませんが、6 節以降では、もちろん、「9:6 しかし、神のことばは無効になったわけではありません。イスラエルから出た者がみな、イスラエルではないからです。」と言いまして、もはや、自分は、この地上の関係にしばられているのではなく、天国につながれている、新しい関係をこの地で築いているのだと言い直します。

そうすることによって、結論のような言い方になりますが、誰よりも、イスラエルを愛し、同胞を愛し、すなわち家族を愛し、友人を愛し、隣人を愛していますが、だからこそ、彼ら愛する人たちの為に、命をかけて、イスラエルの主、世界の主である

キリストにこそ結ばれると言うのです。
　同じような思いで、神に仕えた人たちがいます。

　たとえば、アブラハムです。おいのロトと離れて旅に出たアブラハムですが、ロトが住んでいたソドムとゴモラの地を滅ぼすと神に告げられたとき、まるで、値引き交渉であるかのように、もし 50 人正しい人がいても滅ぼしますか？と神に尋ね、滅ぼさないと聞くと、45，40，30，20 人、正しい人がいたらどうかと聞き、最後には、ロトの一家は増えて、数十人になっているかも知れないが、もしかしたら、その中でも神を信じる人が減って 10 人くらいになっているかもしれない。アブラハムは、怒らないで聞いて下さい。10 人ならどうですか？と聞き、10 人でも正しい人がいえれば、滅ぼさないという言葉を神から引き出したのです。

　モーセは、まさに、パウロのようなことを言います。
　モーセが、神の十戒をいただいて山から下りると、モーセのいない間に、ユダヤの民は、金の偶像を造り、偶像崇

拝者たちがやるように、偶像のまわりで、不品行を重ねていました。モーセは怒り、十戒の板を地にたたきつけて割ってしまうほど怒るのですが、彼らの罪をゆるしてくださいと、神にこう祈りました。

「32:32 今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら――。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。」「書物から私の名を消し去って」くれてもいいというのは、地獄に落ちてもいいというのです。同胞が救われるためなら私を地獄に落として下さいと。

預言者エゼキエルは、民を命がけで守ろうとする人の姿を、こういう言葉で預言しました。**「破れ目に立つ人」**

エゼキエル書「22:30 この地を滅ぼすことがないように、わたしは、この地のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口に立つ者を彼らの間に探し求めたが、見つからなかった。」

このイメージは、敵が攻めてきて、城壁が破壊された、そこから外敵が入ってきてしまう。その城壁の破れ目に命がけでたって、一人で敵と戦い犠牲になる人の事をあらわしています。

満州開拓青少年義勇隊訓練所の隊員たち。16歳以上はシベリアへ抑留された。

H 姉が、戦争中のお父様の事で、その貴重な経験が新聞にとりあげられたこと、そのことをお話し下さった事を話しましたが、その後、より詳しくお父様が記録されていたことを見せていただきました。

この写真は、当時の、満州開拓青年義勇隊の隊員たちです。見ていただいてわかるとおり、まだ、少年たちです。お父様は、長野県の南部から、15 歳の時に中国にわたり、終戦のどさくさの中、ロシア兵と中国の地元の強盗などから、帰国する子どもや女性達 2500 人を護衛して守って南下し、日本にいく船まで送ったのです。また収容所に入れられた人たちで守るために戦いました。収容所に入れても、収容所で、ロシア兵に陵辱(りょうじょく)され殺された。彼ら少年兵は、武器を屋根裏に隠して(みつかると没収された)、夜、地元の強盗団が入ってきたときも、銃を持って夜中守ったのです。しかし、そのなかで、同僚が、

強盗団につかまって鎌で切られ死亡するということも起きたと生々しく語られます。まさに、「破れ目に立つ」とは、そういうことを言うのでしょう。

パウロが今、ここで、していること、告白していることは、まさに、この事でした。「破れ目に立つ」ユダヤ人を守るために、自分が犠牲になったとしても、彼らが救われ、まことの命にいきるためでした。

「9:3 私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」

言わば・・まさに、私が地獄に落ちても、彼らが救われ、天国に行けるなら、私は犠牲になると言っているのです。

もちろん、そのようなことはありません。なぜなら、おそらく彼もよくわかっていることです。それは、破れ目に立つのは彼ではなくて、破れ目に起っていて下さる方が別にいることを明確に理解しているのです。私がキリストか引き離されてもと言う時、神から引き離されそうになっても、その破れ目にたち、私たちを守ろうとされた方がおられることを、彼は明確に理解していたのだと言うことです。

イエス様が、十字架につかれ、私たちの代わりに罪を負い、罪人の代表となられて、私たちの罪を見事に贖われたかたの事であります。

イエス様が十字架につけられ、死ぬ直前にこう叫ばれました。

マタイの福音書「27:46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」

まさに「破れ目に立った」のです。神に捨てられるために。そして、そうしてでも、私たち罪人を救うためでした。

マタイは、その日起きたことを、このように言います。

「27:51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、27:52 墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる人々のからだが生き返った。」

人を蘇らせ、あらたな命を与えるために、キリストは神から引き離され、呪われたのです。

パウロは、このことを良く知っているのです。キリストも神から引き離される覚悟で私たちの命を守り、命を与えて下った。であれば、私も、キリストから引き離される覚悟で、いまだに、うなじのこわい(うなじの堅い)家族、同郷の者たちのために、命をかけようと。

そして、まるで、アブラハムが、同郷のおいロトのために、値引き交渉かのように、駆け引きし、涙の祈りをしたように、一見、神にとっては理不尽とおもわれるような交渉をします。

「9:4 彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法の授与も、礼拝も、約束も彼らのものです。」

この意味は、今や、ユダヤ人が捨てられ、異邦人が選ばれ、私パウロは異邦人のために遣わされています。しかし、どうか、ユダヤ人も捨てないで欲しいのです。あえ

て、お願いします。もともと、選ばれたのは、異邦人ではなく、神よ、怒らないで下さい。ユダヤ人ではなかったですか？契約も、律法の授与も、ユダヤ人のためにこそして下さいました。それをして下さったのはあなたです。真の礼拝もユダヤ人にこそ教えて下さったのです。

強調して読むと、まるで、ユダヤ人を選んだ神よ、あなたにも責任はないですか？とでも訴えているような(そうではないと思いますが・・)

そして、更に言えば、「9:5 父祖たちも彼らのものです。キリストも、肉によれば彼らから出ました。キリストは万物の上にあり、とこしえにほむべき神です。アーメン。」と言い、キリストも肉的に言えば、ユダヤ人ですよね。イスラエル人として生まれてくださいましたよね・・あ、言い過ぎました。すみません。あなたは、ユダヤ人の朱であり、異邦人の主であり、あらゆる被造物の種のです。そして、神です。すみません。でもわかってください。なんとか・・・彼らを救って下さいと言っているのです。

そうです。あのアブラハムのような、まるで人間を値引き交渉でもするかのように、愚かと思われても交渉したようにです。

まさに、エゼキエルの言う、「破れ目に立とう」としたのです。

さて、ここまで教えられて来ました。

もちろん、「キリストは万物の上にあり、とこしえにほむべき神です。アーメン。」私たちが、このキリストから引き離されていいはずがないし、パウロは願っていません。ただ、キリストがしてくださったように、罪人の為に、あえて「破れ目に立とう」とするパウロの姿には私たちは教えられるし、教えられなければならないのです。

(豊明の航空写真)そうです。

私たちの愛する家族や親族、そして、この地にいる方々、この豊明に、そして、愛知県のすべての同胞のために、もっと熱心に祈らなければならないと言うことです。

左の写真は豊明市です。　　右の写真は名古屋です。

私たちは、この地のただ中にあって、そこの破れ目になんとか立ち続けたいと願うのです。すなわち、この世の滅ぶべき人たちの為に、証しをし続けたいと願うのです。

そこに居る人たちが、罪人であっても、いや罪人だからこそ、モーセの時代、モー

セあなた以外は滅ぼすと神に言われたその人たちの中で、モーセは、そこから離れないで、むしろ、その破れ目のただ中に立ちとりなしの祈りを捧げたようにです。アブラハムが、ソドムゴモラは滅ぼされるべきだと言われたその人たちの為にこそ祈り、その破れ目にこそ立ったようにです。私たちも、この週、この地の人々のために、この地、豊明、愛知のすべての人たち、また愛する家族親族のために、キリストの愛を伝える者として、ここから出て行きたいと願うのです。